



親鳥に見守られながら歩くセイタカシギのひな。ふ化して2日。ひなの体はうす茶色で、背中には黒い斑点がある。

最初わたしは、一日おきで埋めたて地に行っていました。それが、三日に二日行くようになり、しまいには毎朝行くようになりました。親子の観察が面白くてたまらないのでした。朝早く行っても、セイタカシギの親子はもう活動をはじめていきます。「セイタカシギって、何時に起きるのだろう？」

起きる時間、埋めたて地に行く時間はどんどん早くなっていきました。五時起きが、四時半になり、四時になりました。けれどいつ行っても、親子は活動をはじめていました。

「鳥はずいぶん早起きだなあ」

感心してしまいました。

そうやって約一か月間、ひなの成長の観察をつづけました。

強い太陽が埋めたて地に照りつけ、はげしい砂嵐が吹きます。その中で、親鳥は懸命にひなを守っていました。

セイタカシギの親子は、とても用心深く生活をしています。ある日、ひとりのカメラマンが小さなテントを持ってやってきました。池のそばにテントを張り、セイタカシギを撮ろうとテントに入りました。けれど親子はアシ原に隠れたまま、出てきません。いやになったカメラマンが、テントを片づけはじめると、ひながアシ原からあらわれ、全速力で逃げていきました。

敵がきた時は、親鳥はむかつていきます。コサギやウミネコが飛んできた時は、オスの親がかん高い声で鳴いて飛び、鳥を追いはらいました。十ぴきほどの野犬の群れがきました。その時は、オスとメスがはげしく鳴いて、野犬の上を飛びまわりました。野犬はしらんぷりで、池の近くを歩きまわっていました。けれどあまりにしつこく親鳥が急降下をしてくるので、閉口してむこうへ行ってしまうました。

自転車の男の人がきた時も、親鳥ははげしく鳴いて男の人の上に急降下します。男



シロチドリ

谷津ひがたこともつうしん

No. 7

一九七八年四月三十日
発行・千葉の干潟を守る会
習志野市津田沼
大浜 清子
編集・国松としひで

春の谷津ひがたはにぎやかです

すっかりあたたかくなりました。やわらかな日ざしが、ひがたにふりそそいでいます。春風もかろやかに埋めたて地や岸べの草むらの上を吹きぬけていきます。

四月のひがたは、冬とはすっかりようすがかわっています。寒い季節は、砂の穴にもぐったままだったカニたちが、待ちかねていたように、ひがたの上にぞろぞろと出てきました。双眼鏡でながめると、ヤマトオサガニが柄の長い眼を立ててまわりにも気をくばりながらえさをとっているのがわかります。

鳥たちの種類もかわりました。カモたちは北の国へ去り、かわって春の旅鳥がすがたを見せています。南の国で冬をすごし、北のシベリヤやアラスカへ渡る途中の鳥たちもここに立ちよって、羽を休め、えさを食べているのです。

長いくちはしのオオソリハシシギ、チウシヤクシギ、羽の色の美しいキョウジョシギ、黄色の脚のキアシシギです。その他にもメダイチドリ、ムナグロ、アオアシシギ、オバシギなど、たくさん

のシギやチドリがやってきます。それに、冬の間もここにいたユリカモメやハマシギ、ダイゼンがみんな夏の服に着がえて見ちがえるようにきれいです。

四月・五月のひがたは華やかな夏羽の鳥たちでにぎわうのです。

埋めたて地の草むらから、ヒバリやセツカのさえずりもきこえてきます。岸べの草むらも少しずつ緑の色がこくまびびって

きました。天気の良い春の一日、草の上ですわって鳥を見たリ、そのさえずりに耳をかたむけたり、青い空にうかんではる雲をながめたりするのはとても楽しいものです。五月五日の子

どもの日には、谷津ひがた写生大会を計画しています。大人も子どももみんな大かんげいです。一度も谷津ひがたにき

いたことのない人もぜひ参加して下さい。谷津ひがたのすばらしい春をつかまえて下さい。



ユリカモメ



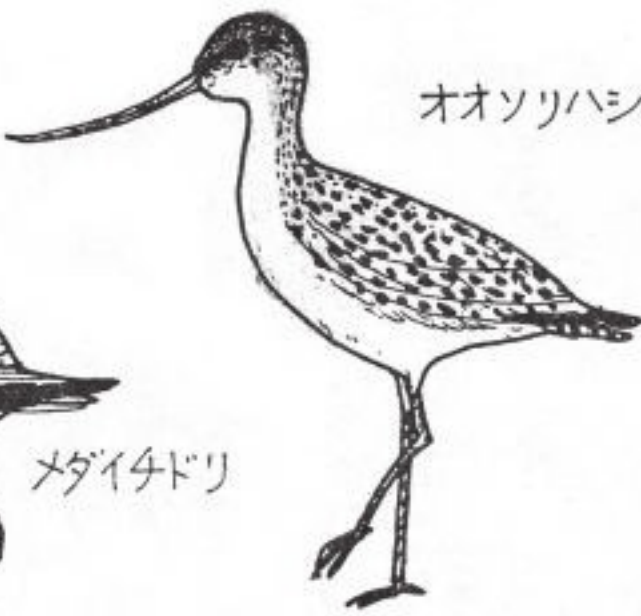
ダイゼン



キョウジョシギ



メダイチドリ



オオソリハシシギ

(右) 実際に刊行された「シロチドリ」第7号の紙面。